

大垣市金生山化石館

# 化石館だより

コラム

## 謎の巨大化石「シカマイア」(その1)

金生山化石館入り口に向かうアプローチの左側に置いてある大きな石灰岩には、たくさんの縞模様が見られます。



この縞の一本一本は貝殻の断面であり、それが無数に積み重なっているのです。縞をたどりながら観察すると、かなり大きな貝であることが分かります。でも殻の厚みはそれほどでもありません。しかし、「八」の字形をした部分だけはとても分厚くなっています。この貝化石は「シカマイア・アカサカエンシス」と名付けられた二枚貝です。金生山では、下部層、中部層、上部層のいずれからでも、大規模なシカマイアの密集層がいくつも見つかっています。金生山化石館の北側にある崖でも、シカマイアの層が西に傾斜して存在する様子が観察できます。

シカマイアは、金生山ではごく普通に見つかる化石であり、特に珍しいものではありません。大理石産業が盛んな頃は、シカマイアの入った石灰岩が、白黒の縞模様を生かした花瓶や壁材、床材として利用されていました。大垣城の石垣にもシカマイアの化石がたくさん入っています。このように普通に見られる化石なのですが、長い間、これがどのような生物なのか全く分かっていなかったのです。実は、シカマイアがどのような形をしていたのかは、今でも良く分かっていないのです。ましてや生息時の姿勢や生態になると、全く分かっていないというのが実情なのです。



シカマイアは、1968年に横浜国立大学の尾崎公彦博士によって記載されました。学名の”*Shikamaia akasakaensis*”は、尾崎先生の恩師である鹿間時夫博士と産地の赤坂に由来しています。尾崎先生はこの化石を“動物とも植物とも分からない所属不明の生物”として記載しました。この報告はあまり注目されませんでしたので、世界の古生物学者にはほとんど知られていませんでした。その後、アフガニスタンやマレーシア、クロアチア、チュニジアなどのペルム紀石灰岩から、シカマイアに良く似た化石が次々に発見され古生物学者の関心を集めるようになります。そし

て1975年には、RunnegarとGobbett両博士が、タンチントンギア(*Tanchintongia*)という属名を付けてシカマイアに類似した二枚貝であると指摘しました。その後、アメリカのYanceyとBoyd両博士により総合的な研究がなされ、1983年にシカマイアという属名が正式に認知されました。シカマイアに関しては、尾崎博士による記載が最初であったことから、属名としてシカマイアが用いられることになったのです。

シカマイアの形がはっきりしないのは、未だに完全体で発見された標本がないことが原因の一つです。シカマイアは、非常に大きいだけでなく、多数の個体が密着して産出します。しかも殻は薄く圧力による変形も大きいので個体として取り出しにくいのです。また、シカマイアの層には付随して様々な巻き貝化石などが産出しますので、化石の採集者には形の分からないシカマイアには興味が沸かなかったようです。しかし、最近になって標本数が増えるとともに復元モデルもいくつか提案されるようになってきました。今、シカマイアは生物史上最大の二枚貝と考えられており、謎に満ちたその姿についての関心は非常に高まってきているのです。



## お知らせ



### <後期企画展> 赤坂石灰岩を調べた学者たち



金生山は「日本の古生物学発祥の地」であり、「日本の古生物学のメッカ」です。

明治から大正にかけて、内外の著名な学者が赤坂石灰岩の地質や化石について調べ多くの報告をしています。こうした日本の古生物学黎明期の研究について紹介しています。

期 間： 10月12日(土)から1月31日(金)まで

場 所： 金生山化石館 休館日は火曜日

入館料は大人100円。18歳以下は無料です。

### <化石講演会> 金生山の化石が語る古生代末の世界

日 時： 2月11日(火・祝) 午後1時30分より

場 所： 大垣市 スイトピアセンター学習館 2F スイトピアホール (入場無料)

講 師： 京都大学教授 大野照文 先生

シカマイア・スカチネラ・巨大化石・大量絶滅をキーワードに、化石生物の復元を交えて、金生山の化石から分かる古生代末の世界について解説していただきます。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email [kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp](mailto:kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp)